

私利私欲ない友の奮闘を励みに



長有紀枝さんは「陸上部のきつい練習や友達との長電話も忘れられない。勉強以外のことをいっばい楽しみました」

知性について思索を重ねる物語。現代社会への批評であり、政治学者の丸山真男がモデルといわれる学者も登場する。「批判的にものごとを見ることを初めて教わった。それまで知らなかった社会科学の世界に興味を持ちました」

も必ず別の出会いがある。今の自分を相対化できる目を持ってほしい」と長さんに『赤頭巾ちゃん』を薦めたのは、歯科医師の丸山(旧姓・鶴町)容子さん(52、82年卒)だ。姉の本棚で見つけた一冊だった。

障害のある人を専門に約20年間、治療してきた。患者が恐怖心を持たないように、治療の説明には長い時間をかける。絵で示したり、行動パターンに組み込んだり。「口を開けてもらうまで」

茨城県立土浦第一高校は創立119年、重要文化財の旧校舎が残る伝統校だ。東京大学に毎年20人前後の合格者を出す進学校としても知られている。

早稲田大学政治経済学部に進んでジャーナリストを志す。だが、アメリカ留学中に「痛切な差別」を体験し、民族問題の研究に突き動かされた。

父も姉も医師だ。自分も医師を志すことに高校まで疑いを持たなかった。昭和大学歯学部に進み、高度な技術が求められることに初めて自信をなくした。「向いていないのでは」とも考えた。だが、職についてからは2人の子育てをしながら必死で走ってきた。

国内外で活動する国際NGO「難民を助ける会」理事長で立教大学教授の長有紀枝さん(53、1982年卒)。中学校ではトッピクラスの成績で、「もっと勉強したい」と土浦一高へ進んだ。

大きな目標を決めて、それに向けて努力したわけではない。その時々で一生涯命やっていたことが今につながったという。「希望通りでなくて

悩みながら道を選ぶ長さんをうらやましく思いつつ、難題に立ち向かう長さんの姿に励まされてきた。

古文が好きで国文学に進もうと思っていたが、2年の時、友達のおすすめで小説『赤頭巾ちゃん気をつけて』(庄司薫)を読んだことが転機になった。

借金もして大学院に進む。研究生活を経て「助ける会」の職員になった。

「私利私欲のためではない奮闘に、自分の悩みなんてちっぽけに感じ、視野を広く持つことができました。そんな高校時代の友達がいるのはありがたいことです」

主人公の男子高校生が

「振り付けを長さんに指導されながら覚えました」



丸山容子さんは高3の文化祭でピンクレディーを歌って踊った。「振り付けを長さんに指導されながら覚えました」

(編集委員・吉田由紀)